

『南京の松村伍長』 短編ドキュメンタリー（30分）2011年作 監督：松岡環・岡崎まゆみ



南京大虐殺にかかわった元兵士たちを追って取材を始めたのは1997年からだ。

第16師団歩兵第33聯隊（三重県久居）に1937年8月に応召した松村芳治（まつむらよしはる）が語る南京大虐殺。足かけ8年の長期間にわたる取材にもかかわらず、話す内容はずうっと一貫していた。

12月13日、揚子江岸に攻め込んだ松村達33聯隊の兵士たちが、揚子江上を流れゆく無辜の人々を機銃掃射した様子。松村は「殲滅したその数、実に5万。思わず万歳を高唱せり」と故郷に手紙を書き送っている。南京陥落の翌日大規模な掃討の中、松村は、難民収容所から引き出した10人の中国人を軽機関銃で殺したこと。「青春時代、軍隊内では、上からの命令は疑問に思うことすらなかった」と松村はしみじみ語る。松村との出会いから亡なる直前まで、私たちは松村の発する言葉と表情をカメラに記録してきた。晩年の松村の映像からは、彼の心のゆれや痛みが垣間見られる作品となった。

湯山村民虐殺の生存者証言—潘巧英さん



1937年の旧暦11月（新暦の12月）日本兵がやってくるといううわさが飛び交って、村のほとんどの人々はどこかへ逃げだした。父はやっと蘇州から家に帰って来たが、近隣に頼る当てにできる親戚もないので村に残ることになった。最初に来た7人ほどの日本兵は煙草を求めたが「ない」と返事をすると不思議なことに「また部隊が来るから、逃げろ。」という。2時間くらいして私が庭で遊んでいると、5人の日本兵がやってきた。剣付きの銃をかまえていた。父方の祖父も便所を済ませた所を見つかり突き刺され、「日本兵が来た！」と私は叫んでいた。隠れる所もなく竈近くに大豆の殻の焚きつけが積んでありそこに身を隠した。一人のお婆さんが目の前で首を2回刺されて殺された。

日本兵が去った後、中二階に隠れていた母や村人17人が湯山道にある小さな寺を目指して避難しようとした。にげる途中の道で、母は抱っこしていた数え年3歳の妹を「赤ちゃんは泣くのでその子を捨てなさい日本兵に見つかる。」と年配の人に奪われ水の中に沈められた。父と祖父、従兄が殺され、妹も死に至った。父の屍は簡単に穴に埋めただけで、妹はその辺に捨てられた。家族は食べられず、その後は一家離散した。（略）

講演 費仲興さん—南京大虐殺史研究会理事「南京陥落直前の湯山での村民虐殺」



南京郊外の湯山地区～麒麟門（湯山鎮、西崗頭、湖山村、湯山街道、麒麟門、句容南部）周辺の広範な地域での膨大な人数の証言者からの聞き取り調査を続ける。湯山（南京東方20数キロ）にある南京砲兵学校の教員を務めながら湯山地区の調査を開始し、南京大学、南京師範大学などの学生たちを指導しての南京市郊外部での聞き取り調査や独自調査をした証言集は『南京大虐殺資料集』70余巻の中におさめられている。

※2005年に招聘した陳廣順、陳秀英 2006年蘇國寶さんたちは費仲興先生の協力により松岡が何度も聞き取りと現地調査をさせていただいた。湯山を攻撃した部隊は、元兵士の多くの日記や聞き取りから歩兵第33聯隊が色濃く関係している。

費仲興先生の最近の著書：『南京大虐殺資料集第27巻』江蘇人民出版社2006年『南京大虐殺資料集第39巻』江蘇人民出版社2007年『城東生死災難』中国工人出版社2008年。論文は多数。



神戸・南京をむすぶ会『2011.8南京・海南島フィールドワーク報告集』（A4、62頁、480円）ができました。購入希望者は、送料（80円）とも560円を表面の郵便振替でお送りください。または80円切手7枚（560円分）を事務局にお送りください。